鑑賞

なぜ青が消えたのか。アイロンをかけている最中に、という極めて日常的な生活の一場面で起こった唐突な出来事に面食らわない読者は少ないはずである。どうして青なのか、なぜ「僕」はアイロンかけをしていたのか。そもそもいったいどういうことが起こっているのか。そういった疑義を冒頭部分から喚起する小説である。しかも、その青の消えていくありさまが、くどいほど直喩を重ねる形で描写されていく。その描写は、青という色が目の前で消えていくという、ほとんどありえない、常識的には想定できない事態を目撃した「僕」にとっては必然的な描写だったのだろう。そのあまりに個人的すぎる体験に対して、「僕」ははじめ自分の方がおかしくなったと判断する。自分の目がどうかしてしまったのだろうと、あくまでも自分側に問題があると感じたのである。青色だけが視覚に捉えられない病にでも罹ったかと思ったりもするが、それも落ち着きを取り戻して再確認することによって否定される。「僕」の外部の存在としてある青が消失してしまったという事態だと、捉え直しているのである。ここから、「僕」による青の捜索が始まっていくことになる。

このように開始される「青が消える」は、なぜ青が消えるのかという疑問自体は、読み進めるに従ってどんどん先送りになっていく。それは、「僕」の行動を読むうちに、「僕」同様、読者もまた青の消滅を受け入れざるを得ない状況に追い込まれていくからだ。青の消滅について尋ね回る「僕」に向かって、他の登場人物は「僕」の疑問を頭から無視する態度に出るからでもある。誰も「僕」に向かってそれはおかしいといったようなことは言わないで、青ぐらい消えたっていいではないか、二〇〇〇年の新ミレニアムを迎えるほうが大事に決まっているとか、そんなことを自分に尋ねないでくれ、自分の責任ではないんだ、というような反応しかしない。そこから逆に、「僕」にとって青とはいったいどんな意味があったのか、青とは何なのか、という疑問が自然に浮かんでくるのである。

青の寓意性を読む準備はもう一つの契機から進められている。この作品ははじめ、現実の時間と空間が自然に叙述されている小説として読めるが、屋外で青を捜索しようと地下鉄の駅へ行く場面で、東京という現実の地名とともに「ブルーライン」という架空の路線が提示される。ここで読者は一気にＳＦ的な近未来の東京を想定せざるを得なくなる。さらにそのＳＦ小説のフレームの中に「中央コンピューター」とか、総理大臣のかわりに電話に出るコンピューター・システムなど、確かに近未来を想像させることがらが次々に収められていくことによって、この近未来の東京が、どのような社会体制、政治体制になっているかということについても、読者は想像せずにはいられなくなる。こうした読みの中で、「僕」がこだわり続ける青が徐々に特権化してくるのである。

すべてのものが消費され、代わりのものがすぐに生産される社会システム。そのサイクルを唯一の時間と認識している人間たちにとっては、一つがなくなれば、別の一つを新しく作れば良いだけのことである。新しいもの、向こうからやってくるものを待ち望み、いつでも未来ばかりに目を向けていることがよしとされる社会にあっては、昔のもの、懐かしい感情を刺激するもの、いま、

ここでの事態を見つめ続けようとすることは、自然に否定されてしまうだろう。そうした社会にあって「僕」の心情と行為は極めて特殊である。

誰にも理解されない想いを抱いてひとり小声で「僕の好きな色だったのだ。」とつぶやくのは、過去から現在の自分を支えてくれているもの、些細ではあるが自分自身をまさしく自分であると確認することを可能にしてくれているものを失うまいとする孤立無援な思想でもある。

「僕」の心情と行為を丹念に追跡していくことは、すなわち、青の寓意性を象っていくことになる。そのとき、青は「僕」にとっての何かに限定されるものではない。読者自身にとって、忘れられないもの、好きなもの、いつまでもそのままにいとおしく、共にありたいと願っているものとして読み取られるはずである。